祖父に寄せて

北海道大学医師会
北海道大学病院　呼吸器内科　阿部結希（あべゆき）

寅年と聞いて、一昨年亡くなった祖父のことを思い出した。ちょうど私とは60歳違いの寅年で、生きていれば来年96歳になる。地元で開業し、長く地域に貢献した内科医だった。葬儀は家族葬であったが、車で告別式に向かう道行きは、地元の方が家から出て見送ってくださっていた。祖父は90歳近くまで働いており、文字通り生涯現役だった。私は祖父の働く姿を見たことがなく、思い出すのはおおらかな笑顔ばかりだ。祖父のような人物をいわゆる地域の名士というのだろうが、同じ医師でも医師共働きで毎日どたばたと生きる私とは随分たちが違うように思う。

「女医のワークライフバランス」などが問題提起されて久しいが、結局は女医のやりくりの問題ではなく、今後はパートナーとともにいかに家庭と仕事を調節するかに帰結すると思うが・・・、閑話休題。なんであれ、私なんぞは忙しい日々が続くと、「ハワイに行きたい・・・」ぐらいのことは考えてしまう。思えば祖父には孫として可愛がられるばかりで、医師としての働き方などについてはついぞ話したことはなかった。祖父もそんなことを考えることがあったのだろうか。90歳まで元気だったとして、私は祖父のように働きたいと思うのだろうか。

ちょうど先日学位論文を提出し、３月には学位を取得する（はずである）。夫も大学院を卒業して、今後は留学の予定もありそうである。上の子も近く小学生になる。職場と家と保育園のトライアングルをひたすら行き来する日々ももうすぐ終わる。環境が変わっていく中で、自分はどんな働き方がしたいのか考えることがあるが、答えは出ない。生き方についてはもっと出ない。

ここから12年はどんな年になるだろう。ホットクックを上回る家電は出るのか。隙間時間の読書やアニメがかろうじての趣味だが、本当はもっと趣味も見つけたい。また友達とだって会いたい。家族がみんな健康だといい。おじいちゃんに会うのはまだ先でいいけど、どんな話をしてもきっとあの笑顔で褒めてくれるだろうと思う。

誕生おめでとう

網走医師会
JA北海道厚生連網走厚生病院　梶野浩樹（かじのひろき）

今年還暦を迎えた。この60年生きてきたうちの半分以上を小児科医として過ごしてきた。そして年を重ねるに従い、赤ん坊が生まれた瞬間に泣きだすのをみて、より慈しみを感じ、また憐れみも感じるようになった。「よしよし、よくぞ元気に生まれてきた」「しかしお前がこれから渡る世の中は途方もなく厳しいぞ」と。

他者に慈しみや憐れみを感じて抜苦与楽を望む気持ちを仏教では慈悲というらしい。私の気持ちは慈悲というには程遠いが、慈しみはともかく、一体何が私に憐れみを感じさせるのだろうか。

日本の将来の経済状況は明るくない。Japan as No. 1といわれた時代があったが、人々は経済発展一途の時代に疲れ切ったのか、あるいはその時代に犠牲にした何かを取り戻そうとしているのか、日本人一人当たりのGDPランキングは低下するばかりである。公的年金制度も持続できないかもしれない。また、気候変動や大地震も心配だ。経済を壊滅させるような天変地異は遠くないのではないか。

それらに加えて私に憐れみを感じさせるのは、あるいはこれが第一かもしれないが、赤ん坊がこれからの人生で、どれだけの荒波を乗り越えなければいけないんだろうと想像してしまうこと。私も振り返れば、人並みかどうかは知らないが、それなりの荒波を経験してきた。それを一から全部やり直せと言われたら閉口頓首するしかない。けれども彼らはそのような荒波をこれからの長い一生の間、延々と乗り越えていかなければならないのだ。

仏教における四苦八苦の四苦は生老病死であり、生まれてしまったからには苦はつきものであるという。シェイクスピアのリア王も「人は泣きながら生まれてくる」と嘆いた。しかし、生まれたばかりの赤ん坊はそんな文言があるとは知らず、私の憐れみなどお構いなしに、元気に泣いて泣きまくる。

赤ん坊にとって還暦の爺さんの憐れみなど余計なお世話に違いない。確かに長い人生には多くの荒波があるけれど、それを乗り越えてこその喜びもある。泣けるほど嬉しいことや楽しいこともたくさんある。赤ん坊の泣き声はその素晴らしい人生に向けた、誕生という開会式の選手宣誓ではないのか。

私の干支から一巡して生まれてくるこれからの赤ん坊たち。君たちのために老骨の私に何ができるのかを考えよう。君たちの豊かで幸せな人生と世界の安寧を祈りつつ。